

東アジアの中の日本ねじ産業を見る

日本ねじ工業協会
専務理事 大磯義和

1 五地域ねじ協会の交流

2007年から、日本、台湾、韓国、中国及び香港の東アジアの5地域のねじ協会による交流大会を開催している。2011年は韓国、2012年は日本、2013年は中国、2014年は台湾、2015年は香港での開催という具合で、各地域が持ち回りで毎年開催してきている。2016年は韓国、そして2017年には三度目となる日本開催が予定されている。10年にわたるこの交流会も変貌を遂げてきているのが現状であり、改めて交流会の意義を問い直す時期に来ていると思っている。

写真 2015年香港の講演での記念品授受(左側が筆者)

2 東アジアでのねじの生産・輸出・輸入

世界のねじ生産量の2/3を、日本、韓国、台湾、中国の4地域によってシェアし、その内の40%近くを中国が占めていると筆者はみている。日本は20%程度の占有率しかなさそうである。これは、(一社)日本ねじ工業協会が参加する“五地域ねじ協会交流大会”で配布された統計資料を元に、香港を除く4地域の7年分の統計推移を集計して分かったことである。4地域を対比した図1が生産数量、図2が輸出数量、図3が輸入数量となる。これらの統計から、日本・韓国の停滞、台湾・中国の伸長が分かる。ただし、生産金額は、為替レートの変動に左右されるので示していない。これら東アジアの4地域の特徴をおおまかに見てみる。日本は内需が横這いで、輸出もあまり振るわない状況が続いている。韓国は自動車向けに大きく依存しており、横ばい状態が続くと見る。台湾は輸出で成り立つ経済なので、米国の景気回復に助けられて輸出が伸びている。中国は力強さが欠け、経済の下降局面が現れてきているけれども、依然として世界一のねじ生産国の位置を保っている。

図1 生産量の対比

図2 輸出量の対比

図3 輸入量の対比

3 東アジアの中の日本の地位

東アジアの4地域に限って見るかぎり、ねじ生産の順位は中国、日本、台湾、韓国と続

き、大きな変化は暫くないと思える。今後の趨勢は、東南アジア地域のインド、インドネシア、ベトナムなどの新興国の動向により、現地生産・現地消費への影響が景気を左右することになる。また、世界経済の中で米国及び欧州の景気動向、中国の成長率の鈍化も見逃せない。日本政府はロボット革命、IoT、インダストリー4.0などの新産業革命への戦略の加速を謳っており、これらがねじ産業へどれだけの影響を与えるか十分な検討も必要となる。

ねじ産業に限ったことではないが、インターネットに依拠する新産業革命の成否が、東アジアにとどまらず世界の中での日本の地位を決定づけることになり、不確実な競争環境が今後も続くことに異論はないと思われる。いずれにしても、日本ねじ産業が現在の地位を確保し続けるには、技術力の向上を怠らないことである。

(参考) 日本ねじ工業協会は、ねじの重要性を知ってもらうためのビデオ(図4)を製作して、ねじ産業の地位向上の広報に役立てている。

図4 一般向けの広報ビデオ「この世はねじでできている」のDVD(日本語のみ)